

2020 年度日本語教育学会学会賞 受賞コメント

川村よし子 (チュウ太プロジェクトチーム・代表)

学会賞受賞の連絡を頂戴し、チュウ太プロジェクトチームの一連の活動を見守ってくださった皆様の存在がとても嬉しく、かつ、ありがたく思いました。この受賞は私個人ではなく、チームに与えられた賞だと思います。『リーディング・チュウ太』は情報科学分野のエキスパートと日本語教育関係者の強い連携がなければ、20年以上にわたる息の長い活動を継続することはできませんでした。中でも、リーディング・チュウ太の原型を考えるきっかけを与えてくれた北村達也氏，立ち上げ当初からシステム開発を一手に引き受けてくれた保原麗氏，基本理念や運用に関して貴重な助言を与え続けてくれた夫＝川村ヒサオの存在がなければ、チュウ太はここまで成長できませんでした。さらに、辞書の開発は、日本だけでなく世界各国の多くの日本語教育関係者に支えられています。日日辞書の編集では語義ごとの例文作成は大変でしたし、各言語版の辞書編集は日本語と各言語の双方に精通しているとともに、膨大な時間と労力が必要です。チュウ太の理念に共鳴し、協力してくださった皆様に、この場を借りて深く感謝いたします。



この20年の間にICT環境も社会も大きく変化し、チュウ太のユーザーや活用方法も変化しました。公開後数年は、主に日本語学習者が読解のために辞書ツールを利用していました。ヨーロッパでチュウ太を紹介した際、参加していたドイツ人の先生からの「私は今の学生にジェラシーを感じます」との一言がとても印象的でした。その後、日本語教育関係の方々が日本語教材作成や研究のためにレベル判定ツールを活用し、近年は、やさしい日本語での情報発信を目的に公共機関やNPO関係の方の利用が増えています。私自身の研究対象も辞書ツールの多言語化から各種のレベル判定ツールの開発、さらに、やさしい日本語書き換えツールの開発へと移っていきました。ただ、研究対象は変わっても、ユーザーにとって有益で、かつ、使いやすいツールをWeb上に無償で提供するという基本理念は守り続けてきました。一連の研究とシステム開発を通して、考えてきたことが2点あります。多くの方々との連携協力の必要性は前述した通りですが、もう一つは、コンピュータと自然言語の懸け橋となることです。これまで開発を進めてきたシステムは、すべてChasenやMeCabといった形態素解析技術に負っています。情報科学技術は日々進歩していますが、コンピュータはことばの意味を理解しているわけではなく、今でもひらがなのべた書きの解析は苦手です。その一方で、日本語学習者に提供するツールは、可能な限り正確である必要があり、誤解析が生じるときは、その弊害を最小限にするための努力が不可欠です。そのため、私自身の役割は、日本語教師として、チュウ太をトレーニングすることにあると考えてきました。

今後、情報科学技術はますます進歩し、ディープラーニングをとり入れたAIが活躍する時代が来るとと思いますが、AIによる分析結果が正しいのか、また、何故その結果が出たのかについて、常に配慮していく必要があります。これからもトレーナーとしての役割を果たすとともに、会員の皆様と一緒に、コンピュータとの上手な付き合い方を模索していきたいと考えています。

2020 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

藤本かおる（武蔵野大学・准教授）

この度は、2020 年度日本語教育学会奨励賞をいただき、大変光栄に存じます。最近学生によく、「2020 年は教科書に載るような歴史の大転換期で、その瞬間を体験できるのは実は得難い経験だ」と言う話をしています。そのような時にこの賞をいただき、2020 年はそれほど、日本語教育に携わる方々にとって大変な年であったのだということを、改めて実感しました。

拙著『教室への ICT 活用入門』は、2019 年の日本語教育学会秋季大会に合わせて出版しました。その中に書きましたが、2014 年から 16 年にかけて行われた日本語教師研修の反転授業シリーズから、徐々に日本語教育でも ICT を活用しようという土壌が生まれていると感じていました。しかし、まさか出版の数ヶ月後にほとんどの授業がオンライン化すると、当たり前ですが全く思っていませんでした。

授業のオンライン化が始まった時、自分自身に何ができるのかを考えました。私がこれまで実践してきたことは、本当に微々たることでしかありません。そして、実践を論文にして発表しているわけでもありません。それでも、学びを止めないために奮闘している先生方のお役に立てないか。そう考えて SNS でオンラインバー（ママである私は下戸ですが笑）を開催したり、動画を発表したり、勉強会などをしたことが、なにがしか先生方のお役に立てたとしたら、こんなに幸いなことはありません。そして実は、先生たちとのやりとりの中で最も多くのことを学んだのは、私自身です。2020 年度には、たくさんの教師研修やシンポジウムに登壇させていただきましたが、先生方の実践や授業の悩みを聞いていなければ話せなかったことがたくさんありました。そして、情報と知を共有することの重要性を改めて感じることもできました。色々な話をお聞かせいただいた先生方に、今一度深くお礼を申し上げます。

これまで私たち日本語教育関係者は自分たちのことを、「ICT リテラシーが低い」と思っていたと思います。もちろん、教室への ICT 導入が進んでいたとは言えないですが、それでも今回の現場の先生方の奮闘ぶりを見ていると、「いやいや、日本語の先生たち、自分たちで思っているほど ICT リテラシーは低くないぞ」と私には思えました。というか ICT リテラシー云々の前に、とにかく授業にかける熱意と工夫がすごい！それがこのような未曾有の事態において、いい意味で ICT 活用に活かされたのではないのでしょうか。

残念ながら現在も社会情勢は落ち着かず、教室も日々の対応に迫られています。しかし、コロナが落ち着く頃には、対面だろうがオンラインだろうが、ICT を日本語教育に活用するのが当たり前になっている、そんな世界が間違いなく来る。私たちは一緒に新たな時代を作っているのだと思います。

今回の受賞を励みに、今以上に現場の先生方のお役に立てるよう、今後とも研鑽してまいります。引き続き、どうぞよろしくお願ひいたします。



2020 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

柳田直美（一橋大学・准教授）

この度は「日本語教育学会奨励賞」という荣誉にあずかり、会員のみなさま、ならびに関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。受賞理由として、これまでの教育実践や研究、また、やさしい日本語の研修活動などの積み重ねを幅広く評価していただき、大変うれしく思っております。同時に、みなさまからの「このまましっかりがんばりなさい」というメッセージも感じ、身の引き締まる思いでおります。



今回、このような賞をいただくことができましたのも、これまでの多くの出会いのおかげです。常に研究者、教育実践者としての姿勢を示してくださる恩師の砂川有里子先生をはじめ、尊敬する諸先輩方、忌憚のないご意見をくださる研究仲間、いつも刺激を与えてくれる学生たち、公私にわたってご支援くださるみなさまに、深く感謝いたします。

日本語教育という分野にありながら、私の研究は母語話者の言語行動を対象にし続けてきました。私が「日本語学習者が少しでも暮らしやすくなるためには、日本語の教室に限らず、彼らを取り巻く社会に働きかけることが必要なのではないか」と考えるようになったのは、以前、地域の日本語教室の生徒さんに言われた「先生の日本語はわかりますが、会社の人日本語はぜんぜんわかりません」という一言がきっかけです。日本語教師としてはそこで、「会社を人の日本語を理解するために教室でどのような活動をしたらいいか」と考えるべきだったのかもしれませんが、その時に私が思ったのは、「なぜ外国人だけががんばらなければならないのか？日本人の側もすべきことがあるのではないか？」でした。この経験から「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響—母語話者への日本語教育支援を目指して—」（『日本語教育』、2010年）という論文が生まれ、「非母語話者は母語話者の〈説明〉をどのように評価するか—評価に影響を与える観点と言語行動の分析—」（『日本語教育』、2020年）へとつながりました。日本語教育とは直接関係のないように見えるこの両論文が、ともに論文賞をいただくことができたのは、日本語教育学会が、日本語教育を取り巻く社会に目を向けた研究課題も重視してきてくださったからだと思います。

これらの研究成果は本当に小さな小さなものではありますが、今、自治体職員の方や一般市民の方向けのやさしい日本語セミナーなどでご紹介する機会をいただいたり、岩田一成さんとの共著『やさしい日本語で伝わる！公務員のための外国人対応』（学陽書房、2020年）として、日本に暮らす日本語学習者の周囲の方たちにお届けできていることは、私にとって本当に幸せなことです。私には一つ一つのデータを大切に研究を積み重ねることしかできません。受賞理由にある「学術研究に根ざした社会貢献」は私にはまだ遠い目標ですが、いただいたこの言葉を胸に、今後も誠心誠意、一步ずつ努力を続けてまいりたいと存じます。

2020 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

柳田直美（一橋大学・准教授）

この度は「論文賞」という名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。筆者以上にこの論文を理解してくださり、意義をお認めいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。

近年、「やさしい日本語」など、非母語話者とのコミュニケーションにおける言語的調整に注目が集まっています。実は、この研究も当初、「非母語話者にとってわかりやすい言語的調整とはどのようなものか」を明らかにしようと思って始めたものでした。しかし、会話収録調査に協力してくださった非母語話者の方が、母語話者との会話の後、「あの方の説明はとても簡潔でわかりやすかったです。……でも、あれはコミュニケーションではないと思います。」とおっしゃったことで、研究の方向性が大きく変わりました。母語話者に対する非母語話者の評価には、「わかりやすさ」だけでなく様々な観点が深くかかわっている、それを紐解く必要があると感じたからです。

論文では、複数の母語話者の〈説明〉を 60 名の非母語話者に評価してもらった結果と、非母語話者がそれぞれの母語話者の〈説明〉に与えた順位との相関を見ることで、非母語話者が会話において重視するポイントを抽出しました。また、非母語話者からの評価の高い母語話者と低い母語話者の談話を比較し、評価に影響を与える具体的な言語行動を分析した結果、会話への積極的なかわりや相手の理解への配慮を示す言語行動、そして対等な関係性を前提としたふるまいが評価に影響を与えていることを明らかにしました。

私は、「やさしい日本語」は、「わかりやすく伝達するための言語的調整」だけを指すのではなく、母語話者側のコミュニケーションに対する姿勢そのものが含まれると考えています。このことを今回、量的・質的データとともに示せたことは、今後のやさしい日本語研究において、多少なりとも意味があるのではないかと考えております。

非母語話者とのコミュニケーションにおける言語的調整、特に会話における言語的調整の研究はまだまだ進んでいません。私自身、約 20 年このテーマに取り組んでいますが、明らかにできたことはほんの少しです。ただそれは、逆に言えば、この分野が大きな発展の可能性を秘めているということだと思います。今回、「非母語話者に対する日本語教育」ではなく「非母語話者に対する母語話者の言語行動」を対象とする本論文が論文賞をいただいたことが、この分野の発展に少しでも貢献できるとしたら、大変うれしく思います。今回の受賞を励みに今後も研究を進め、ぜひ多くの方と知見を共有していけたらと考えております。

最後になりましたが、改めて調査に協力してくださったすべてのみなさま、研究に対するアドバイスやサポートをくださったみなさま、査読、審査をしてくださった先生方すべてに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



2020 年度日本語教育学会学会活動貢献賞 受賞コメント

小澤伊久美（国際基督教大学・課程上級准教授）

この度は 2020 年度「学会活動貢献賞」を頂戴し、大変光栄に存じます。学会からご連絡をいただいたときには、賞をいただいたことに対しても驚いたのですが、同時に、自分が受賞対象となるほど長く査読に関わらせていただいていたということにも驚きました。

思い起こすと、査読協力を初めてお引き受けしてから 15 年ほどが経っています。その間に、よりよい学会誌を発行するために、査読の体制を含めて様々な観点から議論がなされ、多くの工夫が凝らされてきました。査読者がよりよい査読ができるよう支えてくださっている編集委員ならびに事務局のみなさまに、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

学会誌は学会員のみなさまが共に集い、共に学ぶことを実現する要となる事業の一つであるため、査読者の責任は大変重いと感じています。日本語教育は幅広い領域を対象としており、研究も実践も様々な着眼点から多様な探求がなされて日進月歩の勢いで発展していますが、査読者は、その研究や実践の意義を適切に評価しているかを問われるからです。

そのように責任のある査読をお引き受けしたことが、私にとっては「多くの研究や実践について常に学び続けなければ」という動機づけとなりました。また、複数名で査読する体制であることから、他の査読者のコメントを読ませていただき、コメントの内容からも、査読に向き合う姿勢からも、多くの気づきをいただいています。査読をする度に、学会員の中にこのような投稿論文を書かれる方がいらっしゃるのか、このような査読コメントを書かれる方がいらっしゃるのか、とも思います。学会誌を通して多くの方と出逢い、学ぶきっかけをいただいているのは、むしろ査読者である私自身であると言えるかもしれません。

社会情勢とも密接に関わり合いを持ち、多種多様な利害関係者との複雑な関係性の中にある日本語教育は、今後ますます多くの関係者が手を取り合って歩んでいくことが必要になると思います。学会誌に掲載された論文をきっかけに多くの方がつながり、各地で議論や実践が活発になる、そんな学会誌づくりに少しでも貢献できるように、これからも努力してまいりたいと思います。この度は本当にありがとうございました。

